

マルチプレックス端子が設けられており、FMマルチプレックス・アダプタがあれば、FMステレオが受信できる。ここで本機の性能を例挙するを次のようである。

使用トランジスタは、10石、受信周波数はAM:535~1605kc、FM:76~90Mc、中間周波数:10.7Mc、アンテナ入力インピーダンス:300 Ω 不平衡、最大感度:6 μ V(出力50mW)、実用感度:10 μ V、入力信号(S/N 1mVで)65dB、入力信号レベルひずみ(1mW時)1%、イメージ比:25dB、デ・エンフアシスからの偏差:1kc 0dB、3kc-1dB、実用最大出力:350mW、消費電力約22mAとなつている。

最後にメカニズムというか内部機構について簡単にのべると、同調ダイヤ

ルはこの種のセットにはめずらしく、ギヤドライブ方式を採用しており、これによつて選局が容易にでき、かつ、バックラッシュを軽減しているので、AFCとあいまつて、同調ずれを皆無としている。

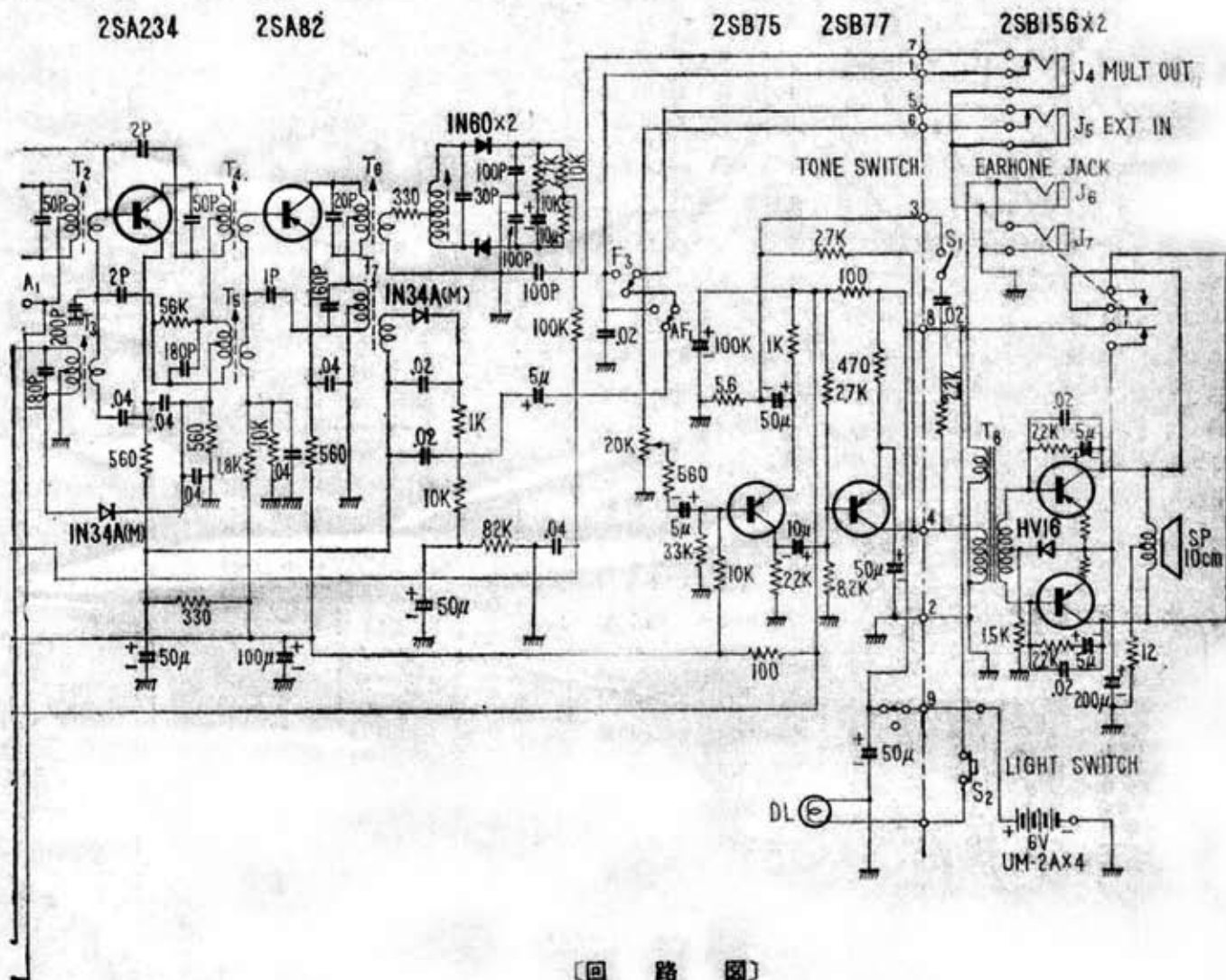
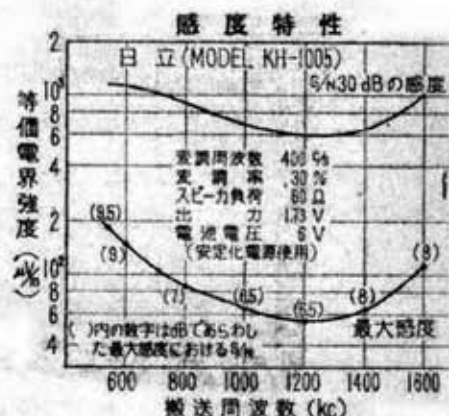
また、ダイヤラ・ランプつきなので暗い所でも容易にチューニングをとることが可能である。

特性について

トランジスタ・ラジオは輸出できたせいとか、各社とも、近年の技術的進歩はいちじるしく、とくに、このセットは、S/N 30dBの感度が12~15dBというよい値を示している。このくらいの値であれば、最近驚異と感ぜられている西独の製品に決して遜色はない

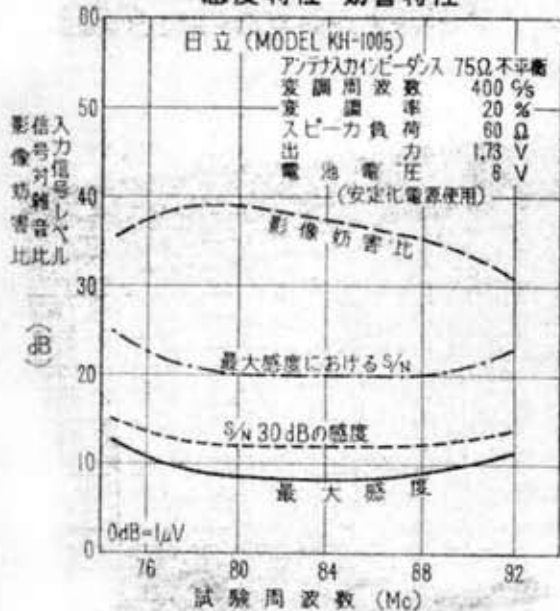
ものであろう。最大感度は10dBを割つていて、これも目をみはらせるものがある。(このときのS/Nが20dBもある)

また影像妨害比は38~31dBぐらいであるから、これも良い値を示している

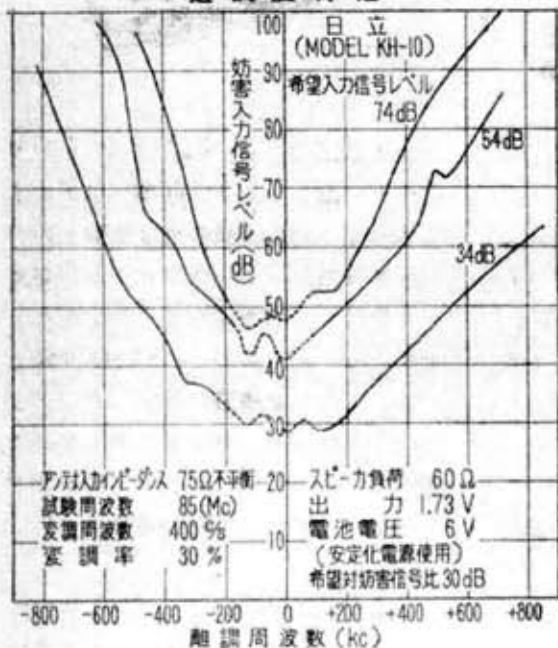


【回路図】

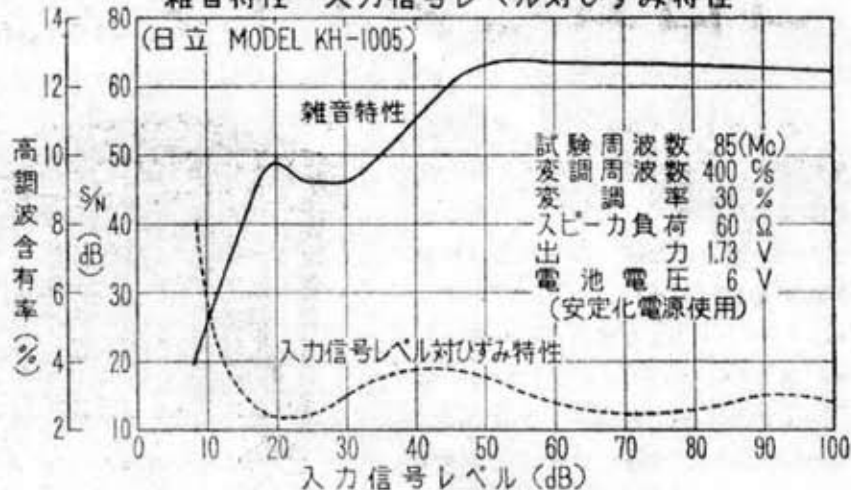
感度特性・妨害特性



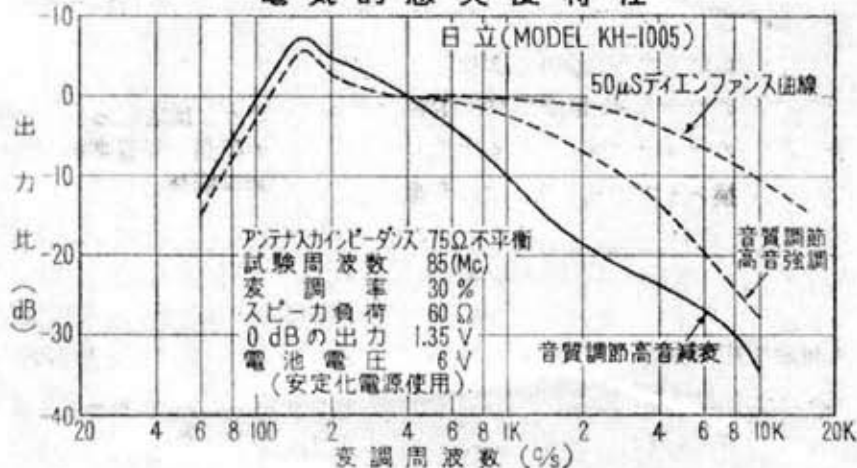
選択度特性



雑音特性・入力信号レベル対ひずみ特性



電氣的忠実度特性



る。エア・バリコンでは、このくらい
 のイメージ・レシオは取れにくいこと
 があつたのが、このような値を示して
 いるのであるから、バリコンのQはよ
 ほどよい値を示しているであろうし、
 バリコンの性能も向上したものであ
 ると考えられる。

入力信号レベル対ひずみ特性は、3
 %前後であるから、トランジスタ式
 としては実用上十分な値であろう。

つぎに出力を変えた場のひずみをみ
 ると、3.23Vつまり 0.18W であるこ
 とは、セットが OTL を使用している
 からである。この程度の出力ならばポ
 ータブルタイプとして十分である。

電氣的忠実度は OTL のものを測つ

ているので、普通の忠実度特
 性のようにカーブを見てはな
 らない。つまり普通のセット
 ではスピーカ負荷のかわりに
 擬似抵抗として、純抵抗を用
 いるのであるから、スピーカ
 のインピーダンスによる影響は出てこ
 ない。しかるにスピーカをいかに負荷

として使う場合は、スピーカそのもの
 のインピーダンスの影響するので、低
 域で持上つたカーブになつてい
 る。このスピーカの共振点が 150 c/s は近
 にあるということである。

実効選択度は左右多少不釣合いのと
 ころもあるが、トランジスタ式で実用
 上十分である。



<本機裏面>